輪郭

岡嶋　晴香

日芸文芸賞ゼミ

はっと目が覚めた心地だった。
そうぽつりと彼女は、口を開いた。
「目が覚めた？」
「ええ。……ああ、私、生きていないんだって」
「それはまた……何かきっかけでも？」
彼女は少し悩むように視線を落とした。虹彩が細まり、遠い過去へと向けられる。カラン、とアイスコーヒーの中で氷が崩れた。
「……本当に、ある日突然だったんです。心地いい微睡みのシャボン玉が、突然パチンと弾けたような」
ああ、でも、と彼女は続ける。肩口までに切りそろえられた黒髪が、少し冷たい秋口の風に吹かれてふわりと浮いた。あの子とは似ても似つかない髪型。脳裏に、腰まで髪を伸ばした彼女の後ろ姿が思い浮かんだ。
「あの日のことは、よく覚えています。綺麗に晴れた夏でした。蝉がうるさく鳴り響いていて……確か暑いからと、近くの古い駄菓子屋さんでアイスを買っていたんです」
またひとつ、カランと氷が鳴る。
一瞬、季節外れの蝉の声がどこかから聞こえた気がした。

妹と私は、一卵性双生児でした。……まあつまり、顔や体が見分けのつかないほど似ていた双子だったんです。仲ですか？　……すごく、良かったですよ。多分、それは異常とすら言えるほど。とにかく四六時中一緒でしたしね。

両親は双子の私たちを本当によく可愛がってくれました。私たちを平等に愛し、平等にしつけ、平等に叱り、平等に甘やかす。きっとお手本のような両親だったんでしょうね。けれど、どこかズレていた。私たち二人は、同じように教育され、同じように愛されて、同じような物を与えられ、同じような服を着ていました。それを、望まれていました。

「あなた達は、本当によく似ているわねぇ。お母さんでも見分けがつかないくらいだわ」

母のその言葉に、私たち二人は誇らしく思っていたんです。妹がいれば何も怖くない。なんでもできるって、本気で思っていたんです。

「ねえ、お姉ちゃん」

「なぁに？」

「私ね、お姉ちゃんがいれば、もうなんにも要らないの」
「私も。あなたさえいれば、私たちは何も要らないのよ」
「嬉しいわ」
「嬉しいね」
好きな色も、好きな果物も、嫌いな食べ物も好きな芸能人も好きなタイプも苦手な教科も……全部、全部同じ。でもそれは当たり前。
「だって、私たちは二人で一人だもの」
「私はあなた」
「お姉ちゃんは私」
「私とあなたは、二人で一人」
「お姉ちゃん、大好きだよ」
「私も、大好きだよ」
私たちは、お互いが存在することで完璧だと思っていました。当たり前のように同じことをするのだと思っていました。

日芸文芸編集部

「今日は暑いね」
どちらがそう言ったのかはわかりません。私の言葉は妹の言葉だったので、気にすることなんてなかったんです。その日も私と妹は、お揃いの薄黄色のワンピースを着ていました。同じサンダルを履いて、同じ髪留めをつけて、同じ歩幅で。
ちょっと古びたお店がちょうど目に止まったからでしょう、暑いね、という言葉に、アイス食べようか、という言葉が続きました。
「何食べようか」
「みかんは無いのかな」
「フルーツの気分だね」
「桃でも良いのだけど」
店先に置かれた小さな冷凍庫の前で、そう呟いていたんです。……いえ、話していた、のだと思います。そして私たちが揃って同じアイスをレジに持って行ったら。
「あれ。同じのでいいのかい？」
そう、年老いた老女が聞いてきたのです。

「どういうことですか？」
「同じもの？」
二人揃って右に首を傾ける。老女はそんな私たちの姿を見て、ほぅとため息をひとつついた。
「ああ……いや、ごめんねぇ。てっきり双子って、みんな同じになるのを嫌がるものだと」
「嫌がる？」
「同じであることが？」
「いやぁ、私の娘も双子でねぇ……。随分とそっくりだったんだが、二人ともお互いに間違えられることを嫌がってね。てっきり双子ってそういうものかと思っていたんだけど」
君らのように仲良しの子もいるんだね。そう続けた老女の言葉は朧気でした。ただただ、私は衝撃だったんです。嫌がる子がいるのか、と。
きっと妹も驚いてる、だって私が驚いたんですから。そう信じきって私は妹の顔を見ました。
「あら、おばあちゃんたら。私とお姉ちゃんは、とっても仲良しなんですよ」
そう、笑っていたんです。楽しそうに、誇らしそうに。
嫌に蝉の音が耳についたのを覚えています。

「その瞬間、目が覚めたんです。ああ、私、妹と違う存在なんだって。そして同時に、私も妹も、自分として生きていないんだって」
「なんというか……本当に些細ですね」
「ええ、その老女の言葉より……私と違う反応をした妹のおかげで。初めてだったんですよ、妹と違うことをしたの」
「それからは、どうしたんです？」
彼女は苦笑いを零しながら、ストローに口をつけた。
稚拙ですけどね。
そう前置きを置いたあと。
「必死に、妹と反対のことをしました。話し方を変えたり、好みを変えたり……」
そこで言葉を区切ると彼女は、クルリと手元のアイスコーヒーをストローで掻き混ぜた。
「その結果、今こうしてアイスコーヒーが飲めてるわけなんですけど」

「……あの子は、甘党でしたもんね」
彼女は小さくため息をつきながら、片手で毛先をいじった。あの子とは全く違う、短い髪を。彼女は何かに耽った瞳を上げ、僕に合わせると苦く微笑んだ。
「妹と違うものになろうって、服を変えたり距離を置いたり……そうしたら、皮肉にも友達が出来たんですよ」
「それまでは？」
彼女は小さく肩を竦めた。
「私たちを気味悪がって、全く」
僕はただ視線を明後日にスライドした。姉のことばかり話すあの子は、いつも一人だった。
「きっと、それが私と妹の一体化を進めた原因でもあるのでしょう」
「……と、言いますと？」
「私たちを別個人として扱う他者の存在がなかった。私たち個人の世界形成をする人物がいなかった、ですかね」
「……」
「やはり、人間は他者の認識や記憶、関係性によって自己を確立するんだと思うんですよ。けれど私たちはそ

れがなかったから」
「閉じられた二人の世界……」
そう呟くと、彼女は同意するように小さく笑った。カラン、と空になったアイスコーヒーの氷がまた鳴る。
「閉じられた世界に他者が存在せず、私たちは二人で一人……。だとしたら、一体誰が私たち二人を別個人の人間として、見分けてくれるのでしょうか」
「けれど、貴方はあの子とは違うことをしたのでしょう?」
「ええ。でも、ダメでした。何より妹が私に合わせてくるんです。妹自身も混乱していたようですけど」
「あの子はまだ気がついてなかったから」
「ええ。妹は、お姉ちゃんは自分自身、と信じ込んでいましたから。きっと最後まで、分からなかったでしょうね」
彼女との間に、重たい空気が流れ込んだ。きっと、同じことを考えている。そして彼女は、僕の知らない先まで考えているはずなのだ。
「……でもそれじゃあ、説明がつきません。あの子がまだ、自分は貴方だと信じていたのなら、なぜあなたと違う選択をしたのですか」

ぎゅ、と彼女は目を閉じた。机に放り出された健康的な肌色をした腕が強ばる。
あの子は真っ白な腕だったな。そんな言葉が脳裏をよぎる。
店内のBGMが、今ようやくハッキリと輪郭を持ち始めた。客の歓談の邪魔にならないように、だが店が寂しくないように配慮されたボリュームの音楽は、けれど僕らの間に流れる空気までは配慮できないようだった。海の中のような窒息感と、ポップで明るい音楽の噛み合わなさが、どこか気持ち悪い。
「……妹は」
静かに彼女は目を開いた。その瞳は、僕の脳裏に焼き付いたあの子と全く一緒だった。
「妹は、こう言ったんです。……お姉ちゃんの考えてることが分からないわ。分からないけれど、望んでいることは何となくわかったの。でもごめんなさい。私にはわからないの。わからないのよ」
あの子と同じ声音で、あの子の言葉が紡がれる。なんともチグハグだ。
「ごめんね、私はお姉ちゃんとしてしか生きられない。お姉ちゃんの妹として生きることは出来ないの。お姉ちゃんは私、私はお姉ちゃん。それ以上でもそれ以下でもないわ。私はきっと、一生お姉ちゃんとして、お姉ちゃんと同じことをして生きていくの。でもそれがお姉ちゃんがお姉ちゃんとして生きていくことの妨げになるなら」

ひゅ、と彼女は息を吸った。だが、その呼吸は吐き出されることはなく、ただ、彼女の胸を少し高く持ち上げただけだった。

「……最期に、妹はそう告げて私の前から去りました」

そう締めくくられたのは、僕が頭を垂らすには有り余る時間が過ぎた後で。僕は、下げた頭の影が映る机をただじっと見つめた。

どこかで、分かりきっていた。きっとあの子は、あの子がいつも語る姉のために死んだのだろうと。だって僕に話したことは全て、姉のことだった。だから僕は、あの子のことを知らない。知らないから彼女の自殺の意味を考えつくことはできなかったし、それと反して姉のために死んだことも分かっていたのだ。

「……ごめんなさい」

彼女の言葉が僕のつむじにかかる。何故、と冷えきったココアに僕は言葉をこぼした。

「妹は、私のために死んだのだから。私が私として生きるために、妹は妹として生きなければならなかったけど。妹にはその方法が分からなかった。分からなかったから、私のために、私が私として生きる方法を考えて」

段々と彼女の言葉が早口になり、そしてぱったりと途絶えた。じっと視線が項垂れる僕の頭部に突き刺さる。それを感じながら僕は、ただ視界が揺れるさまを眺めていた。

「……妹にも、きちんとあの子自身を愛してくれる人が居たのね」
「……僕は、彼女の白い肌が好きだったんです」
「そう」
「長い髪が好きでした。人を思いやる優しいところが好きでした。柔らかい語調が、姉を何よりも愛するところが、好きなんです」
「……まるで私と正反対のところを愛しているんですね」
「ええ。あなたとそっくりな顔をした、あなたとは全く別の彼女が好きでした」
「そう……そうなの」
繰り返されたその言葉は、僕の言葉に答えていたかのような、肯定したかのような、曖昧な輪郭をしていた。